

## パターン 22 - ③ Beatles コードの仲間? (小節ごとの転調)

Verse (テーマ) & Ending (終止)

Bridge (展開部)

### メモ

- ①ジョンの不思議な憂鬱、と解釈、したもののジョンと筆者はトニックの解釈が異なる  
 ⇒ “Sexy Sadie(White Album 収録)” を参考にしたが、ジョンと筆者はトニック(主和音)の解釈が異なる。  
 ジョンはEmをトニックと採っている(トニックをAmとするとF→E7→Am→B♭、FをDm7(サブドミナント)の代理とすれば時折使われるパターン、またAm→B♭はミクソリディアン・モーションの亜型と捉えられる。また譜割も異なり、ジョンは|C・B7|Em |とEmへ戻りやすい動きを提示している)。しかし筆者は間違えてCをトニックと採ってしまった。このトニック(音楽の重心!)の捉え方の違いが筆者の作ったメロディイメージに反映され、全体としては下記②に述べるコード機能の破壊を匂わす結果となった。作成後に気づいたが、これはこれで面白いのか?ただし実際のセラピー場面では、セラピストがメロディ支えをするなどして全体のイメージをクライアントに分かりやすく提示する工夫を要す!
- ②トニックをCとしたため、各小節ごとにC(ハ長)調、B(イ長)調、Em(ホ短)調、F(ヘ長)調へ転調していると筆者は捉える(多少強引?)。転調を繰り返しながらも、劇的な転調感は無くかろうじてまとまりを持った循環コード的展開と捉えられる。いずれにせよ Verse 部の調性はフラフラして不安定な印象
- ③音源では、展開部が22-②と同一なため、テーマ部の提示のみとした(edit)
- ④最初は違和感を持つかもしれないが、繰り返し聴けば耳が馴染んでくる(スルメ音楽)のではなかろうか
- ⑤Beatles の場合コード感のなかで捉える音が独特(非和声音をバンバン使う)で、それが天才たるゆえん!